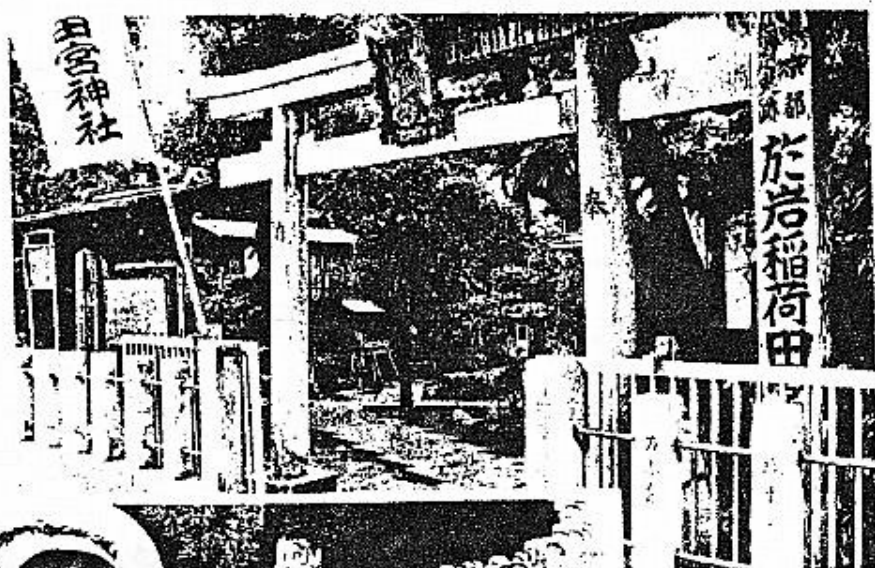


昭和61年7月27日(日)

第146回

史跡めぐり資料

都内四谷方面



四谷於岩荷田宮神社



燃える提灯の中から現れたお岩の亡霊が伊右衛門を悩ませる。

越谷市郷土研究会

加藤 幸一

第146回 史跡めぐり

案内場所 都内^{よつや} 四谷方面

と き 昭和61年7月27日(日)

集 合 越谷駅前 午前8時20分

コース 越谷駅^(前) ^{東武線} (北千住駅) ^{日比谷線} 銀座駅^(前) ^{丸の内線} 四谷駅

-----¹江戸城外堀跡^{セトぼり}-----²四谷見附門跡^{みつり}-----³四谷見附橋

-----⁴旧赤坂離宮(赤坂迎賓館)^{あかさかりきやう}-----⁵西念寺(服部半蔵^{さいねんじ}の墓^{ふせ}及び槍)-----⁶愛染院(塙保己一^{あいせんいん}の墓^{はなむほさいち})-----⁷須賀神^{すか}社(四谷牛頭天王社・昼食)-----⁸お岩稲荷(四谷怪談ゆかりの地)-----⁹四谷笹寺^{よこざら}(勧進相撲始祖^{かんじんずもろ}の地)-----

¹⁰四谷大木戸跡・¹¹王川上水記念の碑--- 新宿御苑前駅

昼食場所 須賀神社境内(室内)
近くに食堂等はありませんので予め弁当用意の事

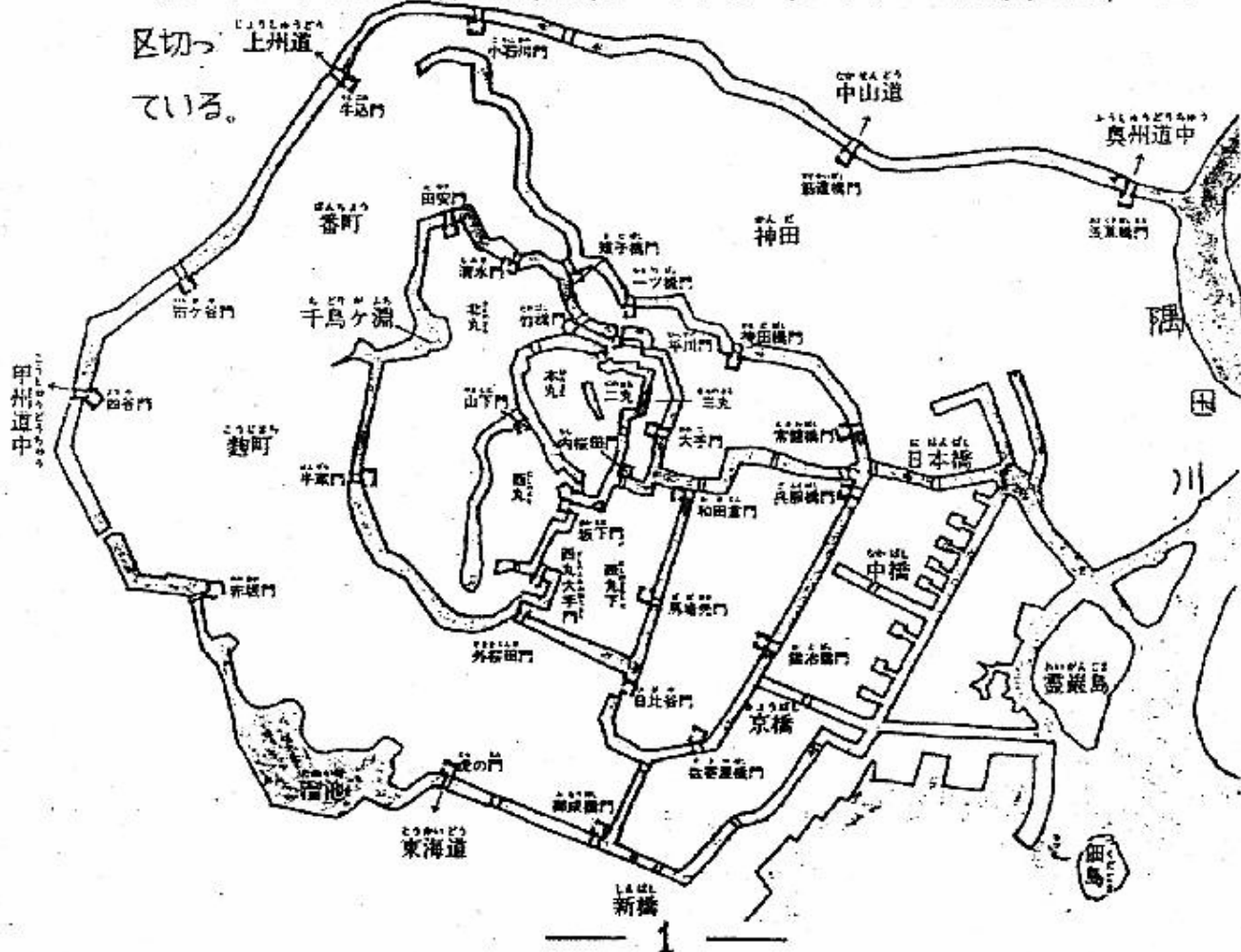
案内者 越谷市郷土研究会理事 加藤幸一

主 催 越谷市郷土研究会

1. 江戸城 外堀跡

徳川氏が築いた江戸城の外堀の跡

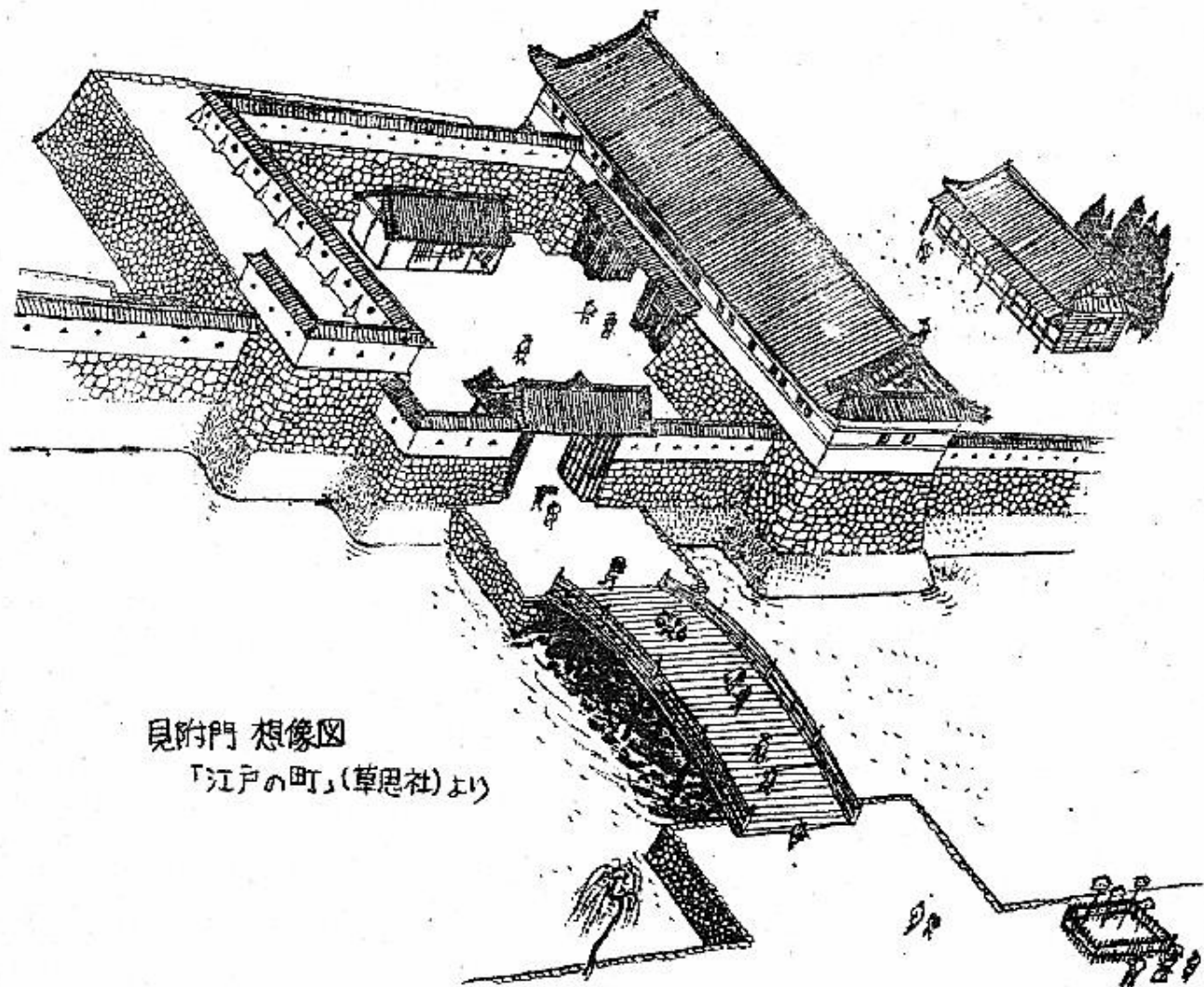
現在 皇居のあるあたりは 平安時代末期から鎌倉時代にかけて 江戸氏の館があった所。ついで室町時代の1457年(長祿元年)に太田道灌がここに江戸城を築いた。その後 安土桃山時代に 豊臣秀吉の関東転封の命令によって尾張から関東に移った徳川家康は すっかり荒れはてていた江戸城を整備し 根拠地とした。1600年(慶長5年)9月の関ヶ原の戦いで 徳川家康は 豊臣政権を支持する石田三成方を倒し、1603年(慶長8年)に江戸幕府を開くと 諸大名に命じて江戸城の大がかりな修築にとりかかった。これを「江戸城総構」といい、三代将軍家光の時の寛永12年(1635)からはいよいよ最終段階に入り、江戸城の西北部の赤坂溜池・赤坂・四谷・市ヶ谷・牛込にいたる外堀がほられ、こうしてこの大規模な工事はほぼ完成する。これによりできた外堀(内堀に対してこう呼ぶ)は江戸城の城内と城外とを区切っている。



2. 四谷見附門跡

堀のそばに置かれ、江戸城の見張所となった城門の跡

見附とは江戸城の番兵の見張所で、堀のそばに多くみられ、枡形をした城門となっている(下図)。その城門の外方に面する部分を正しくはさす。見附と呼ばれた城門は 俗に「三十六見附」と言われるほど多くあった。この四谷見附門は江戸城外堀工事の際、毛利秀就の担当によって築造され、寛永16年(1639)に完成されたもので、甲州道中(五街道の一つで甲府方面に通じる、甲州街道ともいう)の起点ともいえる。今、その見附門の石垣の一部が残っている。なお、この四谷門の他、東海道の虎の門、上州道の牛込門(一部現存)、中仙道の筋違橋門、奥州道中の浅草橋門の以上を特に「江戸五口」と呼ばれ、江戸の城下町の治安をはかるための主要な城門であった。他に、大山道の赤坂門も重視されていた。



見附門 想像図
「江戸の町」(草思社)より

・聖イグナチオ教会

上智大学構内にあるカトリック・イエズス会の教会

昭和24年に建てられたモダン・ゴシック式建築である。なお、上智大学は、ドイツ人ヘルマン・ホフマン師によって設立された上智学院が前身で、大正2年(1913)に日本最初のカトリック系総合大学となる。外堀内にあるグラウンドは外堀の真田堀を埋めたもの。



・主婦会館

主婦連の本拠地の建て物

主婦連合会(主婦連)とは昭和23年、家庭経済の合理化と消費者の地位の向上をめざして設立した婦人団体の全国組織で、その本拠となる主婦会館は昭和31年に建てられた。

3. 四谷見附橋

そばにある赤坂離宮との調和を考えたできたしやれた橋

大正2年にできた外堀を渡る橋で、そばにあった赤坂離宮(現在の赤坂迎賓館)との調和を考えたフランス式のクラシック調の橋であった。この橋ができる前、外堀をはさんで入だてられていた麴町区(現在の千代田区の一部)と四谷区(現在の新宿区の一部)の住民は、大いに喜び、三日三晩にわたって盛大な祭り気分をわきたったという。鋳物製の欄干の中央部には、ひら仮名とローマ字で橋の名が刻み込まれ、また、橋のたもとにある四つの橋灯はフランス風、柱の上に九つの電灯がついている。

4. 旧赤坂離宮(赤坂迎賓館)

現在は外国からの賓客の宿泊所、以前は皇室の所有で赤坂離宮と呼ばれた。内部はベルサイユ宮殿をモデルにし、装飾の豪華さで有名。

江戸時代は紀州徳川家の中屋敷のあった所。明治4年に赤坂離宮となった。離宮とは天皇の宮殿である皇居以外の地に定められた皇室の別邸。明治6年に皇居炎上のため一時期明治天皇の仮御所となったこともある。現在の建て物は明治41年に外観はバッキンガム宮殿(イギリス国王の宮殿)、内部はベルサイユ宮殿(フランスの宮殿)に範をとって建設されたが、昭

和43年に大改修が始まり 昭和49年に完成し 今日に至っている。

・学習院初等科

皇族の子女がいく学校であったが 戦後は一般に開放

学習院は、皇族・華族の子女教育のため明治10年に創立された学校。

・鉄砲坂

新選東京名所図会に「...昔 鉄砲組ありき 故にこの名を存せり 又 其以前は 稲荷坂と呼ばれたり」とある。つまり 鉄砲組の屋敷があったので鉄砲坂といわれるようになった。(標柱の説明文より)

・西念寺 周辺

昔は南伊賀町といい、伊賀の忍びたちが住み、長屋がたてこみ、急な坂、狭い路地、迷路となっていた。

5. 西念寺(服部半蔵の墓及び榎)

榎の名人で、伊賀忍者の頭とされている服部半蔵の墓と、半蔵の榎がある。

榎の半蔵といわれたほどの榎使いの名人服部半蔵の墓は西念寺にある。彼は伊賀忍者の頭とされているが誤りである。彼は家康十六将の一人で、半蔵門(甲州街道の東の終点地にある)内に住んで 与力30騎、伊賀同心200人を支配し 城内外の雑事を指揮した武士である。西念寺を建てた。次は、昭和48年3月に新居区教育委員会がたてた説明板である。

服部半蔵は、家康16将の一人で榎使いの名人だったから榎半蔵ともいわれていた。元龜3年(1572)12月、徳川家康が三方ヶ原で武田信玄と戦って大敗したが、半蔵はその時の武功によって、浜松城で家康から榎一本を拝領し、伊賀者150名を預けられた。以後半蔵は伊賀者の指揮者となる。〔この他に1582年、本能寺の変が起ると 堺を見物中の家康を守って伊賀の山越えをし 命を救った功もある(筆者注)〕

家康の江戸入城後、半蔵は江戸城西門である四谷通りに面した門の近くに住んだので、門に半蔵門という名がついた。伊賀者たちも半蔵門一帯に布陣して住んだ。

半蔵は晩年仏門に皈依(仏門にはいること)して西念と号し、文祿2年(1593年)に清水谷(現在の清水谷公園のあるあたり)に寺院を建てたが、寺は法名をとって西念寺とした。

のち江戸城^{おにやう}花張工事のため 同寺は寛永11年(1634年)に現在地に移された。半蔵は慶長元年(1595)11月14日に55才で死去した。墓碑は宝きょう印塔で 享保13年(1728)に修理され、さらに第二次大戦で破損し、修復された。

彫刻・工芸 服部半蔵の槍

西念寺に所蔵されている槍は前述の家康から拝領のものであるが銘はない。安政の地震で先が三十センチ、昭和二十年の戦災で手元が百五十センチほど折れたが、まだ二・四メートル程の長さがあり、重くて持ち上げるのに苦勞するほどである。これによっても半蔵が大男で力の強かったことが分かる。

槍の形は完全ではないが、日本名槍の一つに数える専門家もある。

- 永祿元年 (1558) 服部家は伊賀の豪族の出。半蔵の父の代から三河に移り住み、徳川家に仕える。半蔵の初陣は16歳の時の三河・宇土城攻めで、早くも伊賀忍者6・70人を率いて戦う。
- 永祿12年 (1569) 掛川城攻略(今川氏を滅した戦い)にも参戦。
- 元龜3年 (1572) 三方ヶ原の合戦に参戦し、家康から槍一筋を授けられる。これが、西念寺に伝わる槍。
- 天正7年 (1579) 家康と正妻の築山御前との間に生まれた徳川家の長男(跡取り)信康は9歳で信長の娘徳姫と政略結婚。のち折り合いが悪く、毒徳姫は「夫と姑が敵の武田氏と内通」と父信長に通報。怒った信長は家康に信康の切腹を命ず。家康は徳川家のため涙をのんで受け入れる。家康の命で使者となり、遠州二保城にいた信康に切腹を迫ったのが天方通綱と服部半蔵。信康21歳、半蔵37歳。信康切腹事件。この時、半蔵が心ならずも介錯したか、通綱が討ったか、半蔵は殺したように見せかけて逃がしたが不明。
- 天正10年 (1582) 本能寺の変の時、家康を山越えで救う。家康は半蔵に、この逃走作戦に参加した忍者200人を召し抱えさせる。
- 天正18年 (1590) 家康とともに関東入国
- 文祿2年 (1593) 今の千代田区の清水谷に庵居を建てる。
- 慶長元年 (1596) 三河時代、「鬼の半蔵」と呼ばれた半蔵は55歳でこの世を去る。庵居は故人の遺志もあって西念寺となる。

くことを決めました。半蔵も主君に従い江戸に入国しましたが、信康の靈を葬うために剃髪し、名を西念と号し、麹町清水谷(貝塚)に庵居を設け、遠州以末奉持していた信康の遺髪をここにうめて、専林念仏の毎日を過したのであります。

文祿二年(一五九三)家康公より信康の靈並に徳川家忠魂の冥福を祈念する爲一宇を建立せよとの内命をうけ、半蔵は金百兩を賜わつたと記録されてあります。寺院建立を果さず、文祿四年(一五九五)十一月十四日五十五才で死去したのであります。

法名は、せんしやういん 専林院殿 あんよさいねんだいせんじやうもん 安養西念大禪定門

その後同所に一宇の建立が成りましたが、山号、寺号は法名からこれをとり

専林山 安養院 西念寺

となつたのであります。

寛永十一年(一六三四)徳川幕府の政策で、江戸城外廓拡張に伴う外濠新設のため、濠の外に集团的に各寺院を配置、西念寺は現在地になりました。

昭和三十年(一九四五)五月廿五日戦災ですべての建物は焼失しましたが、廿六年

十一月本堂再建現在に至つてあります。境内には信康の供養塔、半蔵の墓があり、半蔵の捨も寺宝として保管されてあります。

以上

専修山 西念寺

専修山西念寺は、今から三百八十餘年前、文祿二年（一五九三）翻所清水谷に服部半蔵正成（後に石見守となる）南基となり、南創されたものであります。

南基の服部石見守正成は、徳川家康の家来の一人で捨の名人といわれ、忍びの達人でもあつた。討取つた人々の遺善のため、専修念無上人に帰依し、上人を南山と仰いだのであります。

徳川家康は、藥山御前との間に長男信康がりましたが、信康は武勇の秀れた人で、織田信長の注目する所となり、自分の娘を嫁がせ一族とし、二女がかりました。然しながら織田家にとつては、この信康の存在は恐れられ、遂に信康の乱心を理由に義父信長は切腹を命じたのであります。この時二十一歳。

当時天下をとつていた信長の命令に、家康は背かず、徳川家のため遠州二俣城に、謹慎中の信康へ使者をつかわし、断腸の思いで切腹を命じたのであります。そのとき介錯を命ぜられたのが、服部半蔵でありました。如何に主君の命とはいえ、遂に果すことが出来なかつたのであります。この事があつてから半蔵は、世の無常を感じ、信康の冥福を祈るため、仏門に入ったのであります。

天正十八年（一五九〇）八月、家康は江戸に入国し、ここに江戸城を築き幕府を置

・文化放送 --- タレントを一目見ようとトランジスタ・ラジオのイヤホンを買って
カメラをかかえて待ちかまえているファンが入口あたりにみられる。

6. 養楽院 (堀保己一の墓)

① 養己一の大学者

堀保己一は、延

享三年五月五日

(一七四六)武

蔵国虎王郡保赤

野村百姓宇兵衛

の長男として生

れた。名を直之

助、辰之助とい

い、長じて子録

保木野一と改め

三十歳の正月勾

頭城につき、師

匠雨宮檢校の嫡

姪をつぎ、嫡を

② 養己一、名も保己一と改めたのである。つまり、文選とい

ふにある「保己安百年」の言葉からとったものだという

し、このとき、堀保己一は、その成するところがあつて、十五

歳のとき、江戸に出て、雨宮檢校の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

養己一は、雨宮の嫡姪として、雨宮の門に入った。ここに於て、

④ 校訂して十人扶持を賜っている。

寛政五年(一七五三)四十八歳のとき、幕府に願ひ出て

江戸奥六番町に和学講談所を創設し、国学研究の場とした。

そして二年後には幕府の直轄となり、林大学頭の下に

おかれたのである。

儒学全盛の江戸時代において、保己一によって創設され

幕府の直轄となった和学講談所の存在は、国学教育史上大

に注目し得るものといわねばならない。十二年後には、幕

府となり表六番町(現千代田区三番町)に移転し、幕府の

崩壊と命運を共にし閉鎖となつた。約七十二年間の存在で

あつた。

附則で目あきめくらに

みちをさき

とつたわかれたのも此頃であらう。爾来その門からは、

代弘賢、松岡辰方、稲山行教、石原正明、中山信若らの碩

③ 己一三十八歳のとき歿した。保己一にとって、此の師檢校

に蒙つた恩恵は、忘るることの出来ぬ深きものであつたこ

とを述懐している。

二十四歳(一七六九)歌学の師萩原宗園の契めにより、

真淵の門に入り、まず六国史を学んでいるのを見て

保己一の歴史に対する深い関心がよみとれる。しかし、真

淵の門にあることわずかに半歳、師真淵は病歿してしま

つた。これは保己一にとって、大きな不幸であつたが、これ

に屈せず、学問の道に精進した。そして真淵に学んだとこ

ろを根に、次第に自己の学問を確立していった。

当時本居宣長も真淵の門にあり、また太田南畝(蜀山人)

との親交も此頃はじまつたものである。

三十八歳(一七八三)で檢校(旗本と同格)に進み名声

漸く高く、博学強記なるを認められ、四十歳のとき水戸公

(文公)の依頼により「参考源平盛衰記」「大日本史」を

著した。

⑤ 学が輩出している

保己一七十歳のとき(一八二一)特に学問的功績のい

ちるしきをめでたし、將軍家前に御目見えを許され、文政四

年(一八二二)総檢校となり、この年歿す、ときに七十六

歳であつた。

保己一の学問的活動のうちその成果の最大なるものは、

やはり「群書類伝」である。次に和学講談所の創設、水戸

の歴史及び多くの編纂著述の書を挙げねばならない。保

己一が諸家の記録、中世が濃減するのを歎き、中世以降の

文献をあまた集めて、校訂の上、約四十年間の歲月(一七

九一—一八一九)を経て編纂刊行したのが「群書類伝」で

ある。これによれば小冊子の將來の散佚を防ぐために、

古書として出版することを目的としたのであつて、古書の

保存とについては、遠い將來を見透した卓越した考へに立

つていたことがわかるのである。

堀記念館の「案内葉り」より

江戸時代の目くらの国学者 塙保己一の墓がある

塙保己一は 児玉郡保木野村 (現在の埼玉県児玉郡児玉町保木野) の生まれで 7歳の時 失明し 盲人となった。15歳の時 盲人の修業のために江戸に出る。記憶力が抜群にすぐれていることから盲人でありながら学問の道にすすみ、ぼう大な知識を耳から学びとって 和漢 (わが国と中国) の書によく精通して すぐれた国学者となった。「群書類従」の著書は特に有名で これは 国史・国文のわが国最大の史料となっている。また、幕府の援助を受けて 江戸の番町に 国学を教える和学講談所 (千代田区三番町の九段坂南側、大妻女子大学の付近に その位置を示す標柱あり) を創立している。

史跡 塙保己一墓

保己一は 延享三年 (1746) 武蔵国児玉郡保木野村 (埼玉県) に生まれ、姓は萩野といった。幼名は辰之助、五才の時 瘧を病み 七才で失明したが十三才のとき江戸にでて、雨宮須賀一揆校の門下となり、その本姓塙をもらった。のちに萩原宗国に国学、川島貴林に漢学と神道を、山岡俊明に律令、東禅寺の僧孝首座に医学を学んだ。宝暦十三年 (1763) には一座の衆分になった。のちに賀茂真淵の門に入り、安永四年 (1775) 勾当 [座頭の上で 揆校の下] に進み、保己一と改名した。天明三年 (1783) 揆校 (盲人の最上級の官名) に進み 日野資枝、外山光実と和歌を学んだ。寛政五年 (1793) 和学講談所を設立し、幕府から資金の援助を受けて書籍を収集し 門人の指導にあたった。文化十二年 (1815) 功により、江戸城に登城することが許された。文政二年 (1817) 門人の中山信名、屋代弘賢らの助けを得て、「群書類従」を完成。さらに「続群書類従」の編さんをした。文政四年 (1821) 総揆校となり、同年八月病にかかり、同年九月十二日七十六才で死去した。

昭和五十七年三月
東京都新宿区教育委員会

四谷須賀神社

1. 祀ってある神

主祭神 $\left(\begin{array}{l} \text{須佐能男命} \text{ 別名(須賀大神)} \\ \text{宇迦能御魂神} \text{ (稲荷大神)} \end{array} \right.$ 二柱の大神を御両社として奉斎してあります。

尚、合殿として、 $\left(\begin{array}{l} \text{大國主大神} \end{array} \right.$

合殿として、 $\left(\begin{array}{l} \text{日本武命} \\ \text{天之日鷲大神} \end{array} \right.$ 二柱を奉斎す。(四谷大鳥神社)として、十一月の(酉の市)大祭は賑か

す。

2. 故事来歴

今の須賀神社はもと稲荷神社でした。その稲荷神社は、往古より、今の赤坂、一ツ木村の鎮守で、清水谷に有ったのを、後寛永十一年に江戸城外堀普請のため、当地(現在地)を替地として拝領、移し奉ったものと伝えられています。

須佐能男命の鎮座の儀は、寛永十四年、鳥原の乱に日本橋大伝馬町の大名主 馬込勘由と云う人が、幕府の命に依り、兵站伝馬の御用を勤めましたが、その功績に依り、現在の四谷の中心部一円の地を拝領したのを機会に、寛永二十年、神田明神社内に祀って有りました、日本橋伝馬町の守護神(須佐能男命)を地元民の総発意で四谷の氏神様として勧請し、翌寛永二十一年六月十八日に、前述の稲荷神社に合祀し、御両社として祀る様になり、俗称四谷天王社と云い明治維新まで親しまれてきました。明治元年に須賀神社と改称され、明治五年に郷社に昇格、戦後は制度の改正により、旧社格は撤廃されました。戦後は、等級で決められ、当須賀神社は一級社です。

社名の須賀とは、須佐能男命が出雲の國の嶺の川上に八俣の大蛇を討ち平げ給い「吾れ此の地に来たりて心須賀、須賀し」と宣り給いて、宮居を占め給いし故事に基づき名付けられた名称です。

3. 須賀町と云う町名との関係

現在の須賀町は、昔はお寺が多い処から寺町と云われましたが、明治以後、前述の故事にならい須賀町と改称され今日に至っています。

4. 行事、文化財等

(1) 神社の年間行事

(1月1日)元旦祭 (2月3日)節分祭 (4月中)(八重桜満開の頃)稲荷祭執行
(6月)須賀神社恒例大祭 (8月)夏祭り (11月)大鳥神所大祭(四谷酉の市)
(11月)七五三祝祭

以上が年中の主たる行事です。

(2) 文化財について

三十六歌仙の額(天保七年作) → $\left(\begin{array}{l} \text{画} \text{ 大岡雲峰} \\ \text{書} \text{ 千種有功卿} \end{array} \right.$

画工は四谷南嶽と称せられた、高芙蓉の高弟大岡雲峰画、文苑時代の画家。

歌は千種有功卿の書で、千種有功卿は千々通舎と号し正三位中納言で一種の風を詠じた人と云われています。

その他、戦災を免れた御本殿内の格天井の草花の図は天保十四年に大岡雲峰が八十才の時に描いたものであり、現在は以上の物しか残っていません。

その他の多くの当神社の社宝等、文化財は戦災に依って御社殿と共に焼失してしまいました。

・天王坂(てんのうざか)

須賀神社を天王様とも呼んだのでこの坂名となった。須坂・東福院坂ともいう。御府内備考に「里俗ニ東福院坂ト相唱^{あひひやう}、又ハ天王坂共唱候^{ともひやう}」とある。天王とはインドの祇園精舎の守護神である牛頭天王を意味している。

7. 須賀神社

江戸時代、四谷牛頭天王社として親しまれる

須賀神社は明治以前は四谷牛頭天王社と呼ばれ、人々に親しまれた。明治以降、須賀神社と改称される。主祭神は須賀大神^{すゑのかみ}の須佐能男命^{すさのおのみこと}と稻荷大神^{いなりのみたまのかみ}の宇迦能御魂神である。文化財として、三十六歌仙の額(天保7年)がある。

8. 於岩稻荷田宮神社

四谷怪談で有名な「お岩さま」の住んでいた所で 四谷怪談を演ずる時はたたりがないよう必ずここにお参りに来るといふ。

「東海道四谷怪談」は四世鶴屋南北(孫の五世鶴屋南北と区別するため大南北ともいふ)が書いた歌舞伎台本。これは浪人の妻お岩が夫の不実を怨んで沼に身を投げ、亡霊となってたるといふ巷のうわさをもとにして脚色した怪談物である。歌舞伎の舞台の背景は東海道平塚方面であるが、これはこれを哀じた三代目尾上菊五郎が東海道を下って伊勢参りに行くのを記念して「東海道」と付けたといわれている。実は江戸の四谷の左門町を舞台としていた事は明白。(四谷怪談を演ずる時は必ずお参りに来るといふ)しかし「お岩」に関するほんとうの話はむしろその逆でお岩は幕府の御家人田宮又左衛門の娘で、婿養子の田宮伊左衛門(歌舞伎では民谷伊右衛門)の貞淑な妻で美人でありよく働いて貧しい家を守りまた代々家に伝わる「お稲荷さま」を厚く信仰し1636年(寛永13年)に病死している。そこでこのお岩さんにあやかろうと家内安全・商売繁昌を祈って人々は「於岩稲荷」として信仰するに至った。命日は2月22日。怪談のも

とになるような話は何もない。田宮神社宮司の奥さんはお岩様の10代目。初代又左衛門から数えると田宮保松宮司は10代目、女婿の栗岩英雄現宮司は11代目で、その奥さまはお岩さまの10代目というわけである。

なお、筋向かいにある「於岩稻荷陽遷寺」も田宮家ゆかりの地として「お岩稻荷」を祭っている。

当神社は田宮稻荷又は四谷お岩稻荷と言われて、遠く江戸時代からいろいろな人の信仰の的となつて居ります。

その由来をさかのぼつてたずねてみますと、今を去る二百数十年前、当地左門町は江戸幕府の御家人の組屋敷のあつた所で、現在この神社のあります所は田宮伊右衛門と言う直參の武家の住宅のあつた所でありまして、この稻荷神社は、この宅地内に代々、田宮家の邸内社(やしきかみ)としてお祭りしていたものでありましたが、田宮家の二代目に当りますお岩様は殊の外このお稲荷様を厚く信仰していたのであります。

時代を過ぎ、明治十二年八月、この時の神域が手ぜまな為中央区新川二―二五―十一に移座いたしました。当田宮家旧邸は昭和六年東京都より史跡として指定され、田宮家にて管理いたしました。昭和二十年の戦災で社殿焼失しましたので、その後多く崇敬者の方々が中心となり田宮家十代目たる宮司と相はかり、お社再建の計画を進め、昭和二十七年現社殿復興し現在に至つて居ります。

なお、お岩様は寛永十三年二月二十二日に亡くなられましたので、この二十二日を当神社の祭礼日として毎月奉仕しております。

御墓所は四谷鮫が橋の妙行寺にありましたが、明治四十二年にお寺と共に巢鴨に移され今日もお香煙の絶える事がありません。毎年当寺に於いて盛大なる御法会をいたしております。

ここに当社の由来ならびに現状を話し申し上げて、皆々様の御信仰の手引といたしたいと存じます。

昭和六十年仲無月吉日

田宮神社宮司

十代目 田宮保松

崇敬者一同

文化文政期に江戸文化は爛熟期に達し、いわゆる化政時代を出現させた。「東海道四谷怪談」の作者として有名な四代目鶴屋南北も化政時代の著名人である。「東海道四谷怪談」の主人公田宮伊左衛門（南此の芝居では民谷伊右衛門）の妻お岩を祭ったお岩稲荷神社の旧地である。物語は文政10年（1827）10月名主井八郎が町の伝説を集録して、町奉行に提出した「文政町方書上」にある伝説を脚色したものである。明治5年ごろお岩神社を田宮稲荷と改称し、火災で一時移転したが、昭和27年再びここに移転したものである。

昭和四十三年三月一日 東京都教育委員会

「東京の旅―今日の風土記三」松本清張・樋口清之著・講談社刊より抜粋
 四谷左門町の都電停留所を入ると、於岩稲荷立正殿・長照山陽運寺があり、そのすじむかいに「四谷於岩稲荷・田宮神社」という簡素な神社がある。寺の方は「新宿区文化財 史跡田宮伊右衛門邸跡」と書いてあり、神社の方は「史跡田宮稲荷神社跡―東京都」と書いてある。これはよく考えてみるの意味がある。寺の方はお岩稲荷という名では都も区も認めていない。この場所にお岩稲荷というものがあつたことは幾種類もの江戸の古地図に出ているから疑いのない事実だが、寺の方のお岩稲荷なんていうものは存在しなかつた。だいいち、この場所は古地図では寺も神社もなく、桜井とか岸とかいう御家人が住んでいた。
 宗教法人法によると正規の登録さえしてあれば、誰を祭っても文句がないのだから、無理にもとからある神社のお株をとるようなことをやる必要はない。しかも戦後、世田谷の玄照寺から、とつぜんお岩さまの木像などというものを持ち出して、神社の前にこんな派手な寺を造ってお岩稲荷だと宣伝しては、反感を持つより冷笑されることにはならないか。

「新宿区教育委員会編「新宿と伝説」より
 戦時中この辺一帯が戦災を受けたが、戦後いち早く世田谷区鳥山町一四六番地にある玄照寺の住職で、お岩稲荷とは何の関係もない山岡海辰が、立正殿という寺を建て、そこにお岩稲荷を建てた。こうして左門町には、二つのお岩稲荷が建った。一時、新宿区はこれを区文化財に指定した。田宮家旧地がはっきりしないことと、伝説のあるところとしての指定であつて、建物としての寺を指定したのではなかつた。
 しかし、これは種々誤解を招いたので、その後伝説関係は文化財指定から解除するという方針をとつてまもなく立正殿陽運寺は新宿区文化財から除かれた。
 なお、田宮稲荷神社は、東京都が昭和六年に神社の旧地として文化財（都旧跡）に指定している。

「田宮神社由来記」パンフレットより

東海道四谷怪談(あらすじ)

身を持ち崩した民谷伊右衛門は、娘お岩との離別を迫る舅の四谷左門を殺します。自分の夫が父親殺しの下手人とは知らないお岩は、伊右衛門の加勢で仇討を決心します。

妻お岩の産後の肥立ちの悪いのに愛想をつかした伊右衛門は、隣家の伊藤喜兵衛から、高家への仕官を条件に娘お梅をもらってくれ、と言われて承諾します。

一方、伊藤から貰った薬を飲んで容貌醜悪となったお岩は、按摩宅悦の口から全ての事情を知らされて、夫の無情な仕打ちに憤死してしまいます。

伊右衛門は、家伝の薬を盗んだ下男小平を惨殺し、二人を不義の体にしたてて、戸板の表裏に釘づけにして川へ流します。そこへお梅が嫁入りしたのですが、怨霊のために、お梅と父喜兵衛は殺されてしまいます。

お岩の怨霊に悩まされ、半ば狂人となった伊右衛門は、蛇山の庵室にのがれて、仏の加護を祈りますが、その甲斐もなく、ついに横死します。

妙行寺パンフレットより

9. 四谷笹寺(長善寺)

江戸で初めて勧進相撲がおこなわれた地

相撲の祖は出雲の野見宿弥で、日本書紀の中に当麻蹶速(大和国当麻に住む)と力を比べ、野見宿弥が勝ったとの記述がある。

室町時代末期に豊後府内で催されたのが勧進相撲(神社や寺院の寄付集めのため、お金をとってみせる相撲)の初めといわれる。

江戸時代にはいると、京・坂・江戸の三都を中心に発生し、盛況を呈する。江戸の場合は寛永元年(1624)、四谷塩町の笹寺で明石志賀之助(初代横綱)らが、晴天六日興行されたのが初めとされているが確かでない。笹寺の名称は、二代将軍秀忠が鷹狩りの途中、当寺に立寄り、境内一面に生い茂る笹を見て授けた別名。境内には江戸勧進相撲始祖の碑がある。寛永年間には江戸の寺社の創建が多いため、勧進相撲もいくつかの寺社でみられたであろう。

貞享元年(1684)に寺社奉行の計らいで深川富岡八幡宮境内で勧進相撲が催され、以後さかんとなり、毎年催されるようになる。その後、本所回向院に移り、ここが中心となる。そして明治、大正・昭和にかけて回向院の旧境内にある両国国技館に受けつがれたのである。

10. 四谷大木戸跡碑

江戸時代の頃 甲州街道を往來する物資などを検査した所

1616年(元和2年)現在の四谷四丁目交差点の中央部に 甲州街道の大木戸(江戸時代 都市の出入りに設けた蘭門)が置かれた。これが四谷大木戸で 道の両側に石垣を築き その間に木戸を設けて 明け六ツ(午前6時ころ)から暮れ六ツ(午後6時ころ)まで木戸をあげ 江戸から出る物資などを検査した。 明け六ツから暮れ六ツ以外の夜間の通行は禁止となる。大木戸がここに作られたのは、この場所が山の背のところ、北が谷、南が川で、道はここしか通れないようになっていて、守るのに都合がよかったからである。

碑は昭和34年、丸の内線の地下鉄工事で発見された玉川上水の石でできた樋(水を流して引くための管)を使って建てられたもの。

なお、大木戸は港区の東海道の高輪にもあり、現在、石垣の一部が残っている。

11. 玉川上水記念碑

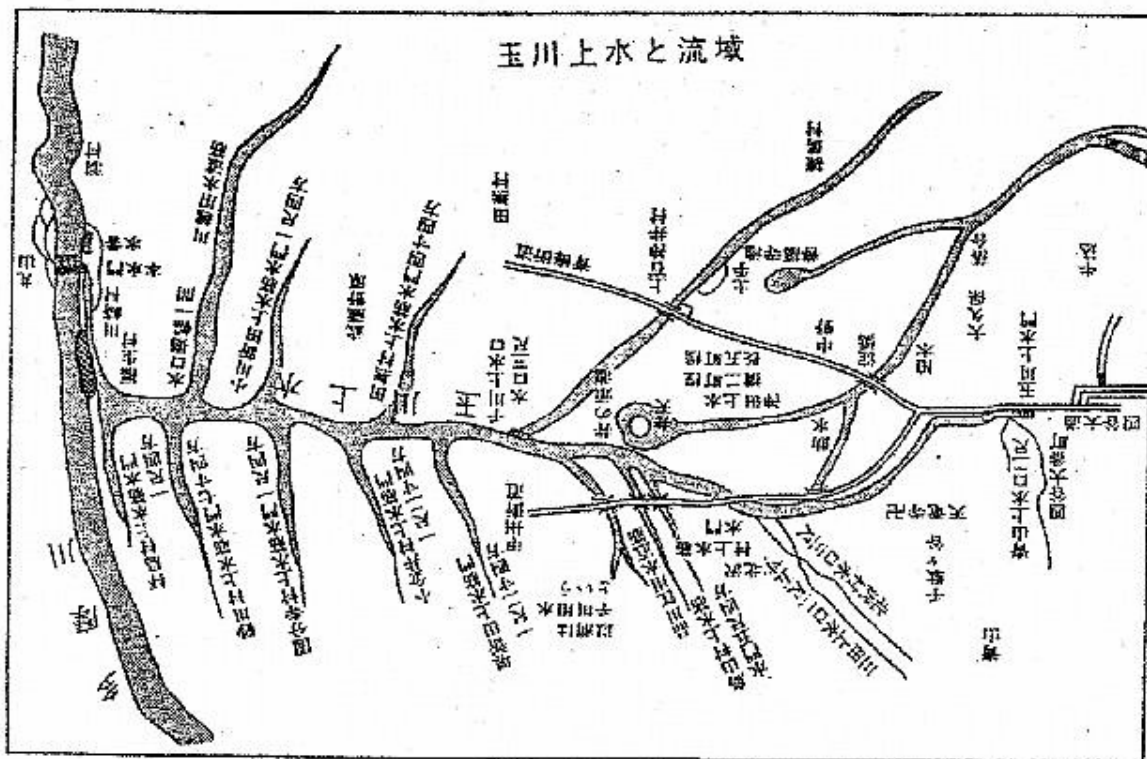
玉川兄弟によって 江戸に引かれた玉川上水の記念碑

江戸時代初期の江戸市民の飲料水は 神田上水や赤坂溜池の水を利用して、しかし 人口が年々増加し 江戸市民の水が不足してきたので 幕府は1653年(嘉永2年)多摩川沿岸の住人である庄右衛門、清右衛門兄弟に命じて工事にあたらせ 羽村から多摩川の水を取り入れ 江戸市民の上水(飲料水)として 四谷大木戸まで 約50kmの暮水溝が翌年に完成した。これは「多摩川」にちなんで「玉川上水」と名づけられ、二人の兄弟はこの功により玉川の姓を賜わり 子孫代々 上水役を勤めた。

説明板より

この碑は、明治28年12月に 建立されたものである。

碑文の内容は、玉川上水をひいた理由や玉川庄右衛門・清右衛門兄弟の苦心の結果 完成したことが記されている。



● 四谷大木戸水番所跡

江戸市民へ上水を供給する玉川上水の水番所のあった所

上水は 大木戸まで堀わりを作って開渠（上部をあげはなした溝）で導かれ 大木戸に水番所（水番小屋）を置いて給水の調節を行なった。大木戸からは暗渠（上部をふさいだ溝や地下に蓋った水路）となって 四谷見附まで導かれ ここから二筋に分かれて木製の樋で 江戸の西部から南部にかけて配水された。

説明板より

玉川上水は 多摩川 羽村の取入れ口から 四谷大木戸まで 開渠で導かれ ここから暗渠で江戸市内に給水された。水番所には 水門があり、満水の時は渋谷川に流し 塵芥〔ごみのこと〕の類も同様にした。また給水を円滑にするため 水量の調節を図る役目を果たしていた。

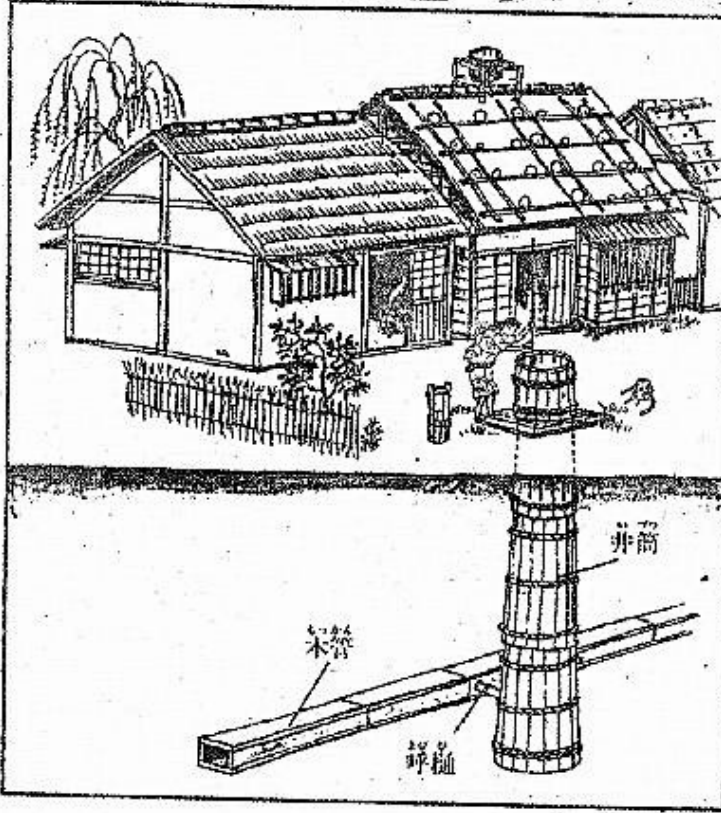
参考にした本（主なもののみ）

江戸の町（上）〔草思社〕 田宮神社由来記〔田宮神社〕 新宿区の歴史〔名著新日本ガイド 東京・横浜・鎌倉〔交通公社〕 江戸学事典〔弘文堂〕 ふるさとめぐり〔東京都教育委員会〕

お岩稲荷に参拝におと
ずれた中村歌右衛門



慈恵 今回四ツ谷方面を御案内いたしましたして、四ツ谷見附門からはじまって四ツ谷大木戸で終わりましたが、近くにもまだまだ見るべき文化財がたくさんあります。例之は四ツ谷大木戸近くには甲州街道口に江戸六地蔵の一つがあり、甲州街道と内藤新宿との関係の史跡めぐと新宿御苑内の散策もおつなものである。いかがでしょう。



玉川上水につけて
急速に大きくなった江戸の給水には、

それとも充分でなく、一六五二年(承応二年)には赤坂溜池上水を廃止し、あらたに玉川上水の工事をはじめます。多摩川の水を羽村から引いたもので、川崎・小金井・田無・吉祥寺・久我山・高井戸・代田・代々木・角筈・千駄ヶ谷など二九カ村一三里(約五二キロメートル)にわたって上水道を築いたので、四谷大木戸からは、地中を通し、さらに四谷門外の箱樋で三つに分けました。その第一は江戸城内へ、第二は麹町一帯へ、そして第三は、四谷伝馬町一帯から紀伊国坂をくだり、溜池の東を通し、虎の門から芝・築地・八丁堀・京橋あたりまで給水したのです。こうして木管で市中に引いた水は、呼樋という竹筒で分けて、樽をさかさにしたような井筒でつくった井戸にためます。それを地上にくみ上げて、飲用水としたのです。飲用水以外の使用は、かたく禁じられており、洗たくなどの雑用には、一般の掘り井戸を使いました。

「江戸の町」より